はじめに

本講義は「現代文が全くできない」「現代文の勉強の仕方がわからない」という人が基礎からはじめて、難関私大合格レベルに達する講座です。最初は簡単に思える問題もありますが、基礎を徹底することによって難しい問題も解けるようになるということを示していきますので、決して手を抜かないでください。また、後半は難しい問題が増えてくると思いますが、予習の段階で解けなくても講義後には必ず解けるようになりますから、しっかりと解説を聞いてください。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題は「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① 文法
② 構文
③ 論理

　たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

　また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

　最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

　以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

　さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして解答してください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答をする」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。ただし、本文に線を引く作業は講義中に行ってください。

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**ポイントを覚える。問題を解き直す。**

難関私立大　現代文　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む……p.8
第二講　「論証」を読む……p.30
第三講　「心情」を読む……p.52
第四講　「様々な設問」を解く……p.76
第五講　「分析」から「総合」へ……p.90

第一講　「差異」と「類似」を読む

「否定（でない）」について

「否定」とは対立する概念「補集合」を作り出す言葉です。否定の前後には「対義語」または「対立する内容」がくるということを確認しましょう。

この否定は、「空所補充問題」や「傍線部説明問題」などを中心にどの設問にもからむ可能性のあるもので、論理的読解の一番の基礎になるものです。正確に分析できるようになって下さい。

「否定」のフレームワーク

①　A　ではなく　B　である。
②　A　よりむしろ　B。
③　A　のようで実は　B。

「差異」のフレームワーク

① Ａ は Ｘ であるのに対し、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。
② Ａ は Ｘ であるのとは異なり（とは違って）、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。
③ Ａ は Ｘ であるのとは別に（とは逆に）、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。

※　二者（ＡとＢ）の違いを説明するフレームワーク。

「類似」のフレームワーク

① A は X である。
　また（同様に、それと似て）
　B も X である。
② A と B はともに X である。
③ A と同様に B も（また）X である。
④ A と B は X という点で同じである。

※「類似」のフレームワークとは、何か（A）と何か（B）の共通点について述べる時に使われるフレームワークです。
※「も」という副助詞や、「また」という副詞に注意すると類似は見つけやすくなります。
※類似を使った比喩を「類比」と言います。
※類似は「アナロジー」「類推」という言い方もあります。

傍線部内容説明問題

「傍線部内容説明問題」とは現代文において、最もオーソドックスな設問です。そしてこれから始まる「各設問別解法」の土台となる「解法」なので、しっかりとマスターしましょう。

その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、どういうことか　説明せよ。
or
どういう意味か

というものです。この問題に対して常に一定のフォームでアプローチするように心がけましょう。それが「設問解法」であり、現代文で常に高得点をとるための王道です。

では、どのようにアプローチするかというと、次の通り、

傍線部説明問題解法

―「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

※① 「文構造」の分析について

★文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

※②「ポイント」になる語句について

★ **指示語（代名詞）**

指 これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など

代 前者、後者、両者、右の、彼　など

★ **比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など**

★ **個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語**

※③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ **同値関係**

★ **対立関係**

★ **因果関係**

★ **包摂関係（抽象と具体の関係）**

以上の関係がある部分と対応させせます。
このような関係で対応した部分が、解答する際の「解答の根拠」となります。

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(ア)われわれが世界を表象する仕方には、知覚と思考のふたつの異なる様式があるように思われる。トマトが赤いことを知覚的に表象する場合には、まさに(あ)ガンゼンにその有様が立ち現れるのにたいし、思考的に表象するさいには、ただトマトが赤いと思うのみである。たとえそう思うときに、その有様がイメージとして浮かんだとしても、この想像が思考ではない。思考はあくまでもそれに伴って生じる想像とは別の心的状態である。

　知覚と思考がその表象様式を異にするとすれば、その違いはどのようなものであろうか。それとも、知覚と思考のあいだには、じつは表象様式の違いはないのだろうか。知覚も思考の一種である、もしくは思考も知覚の一種なのだろうか。知覚と思考の関係をめぐるこのような哲学的問題は、伝統的には脳の話とは無関係に論じられてきた。しかし最近の脳科学の知見は、この種の哲学的問題にたいしても重要な(い)シサを与えてくれる。以下では、知覚と思考の表象様式の違いについて、脳科学の成果を多少なりとも織り交ぜながらコウ(う)サツしたいと思う。

　思考は概念的であるのにたいし、知覚は非概念的であるといわれること

がある【Peacocke 1992】。トマトが赤いと考えるとき、われわれは〈トマト〉と〈赤い〉の二つの概念を(え)コウシし、それらを組み合わせて、トマトが赤いという表象を形成する。このように思考の表象は複数の概念の組み合わせという構造をもつ。

ところで、概念のもっとも重要な特徴は何であろうか。それはおそらくその一般性ないし(イ)文脈独立性であろう。〈トマト〉という同じ概念が、赤いトマトだけではなく、緑のトマトや輪切りにしたトマトなど、さまざまな文脈にあるトマトに適用できる。それゆえ、われわれは〈トマト〉という同一の概念を他のさまざまな概念と組み合わせて、トマトが緑だとか、トマトが輪切りにされているとか、いろいろな思考を形成できる。われわれが無数に多くの思考を形成できる（思考の「生産性」とよばれる）のも、思考が文脈独立的な概念の自由な組み合わせによって形成されるからである。

これにたいして、知覚を非概念的とする見解によれば、トマトが赤いのを見るとき、そこに見えるトマトと赤さは互いに一体となって表象されており、全体の光景から切り離せるような文脈独立的な要素ではない。知覚においては、事物は概念的に表象されているのではなく、文脈依存的ないし相互浸透的に表象されているのである。

このように知覚を非概念的とする見解にたいして、知覚が思考の理由となりうる以上、知覚は思考と同じく概念的でなければならないとする見方もある【McDowell 1994】。われわれはトマトが赤いのを見て、それを理由にして、トマトが赤いと考える。知覚と思考のあいだに理由関係が成り立つためには、知覚は概念的でなければならない。なぜなら、概念的な表象のあいだでしか理由関係は成立しないからである。この見解によれば、知覚と思考の違いは、知覚が外界からの(お)セイヤクを直接受けるという点にのみあることになる。

知覚が概念的かどうかの問題にたいして、最近の脳科学のある知見が非常にシサに富む。この知見によれば、ある状況が知覚されるとき、その状況に備わる諸特徴はそれぞれ脳の別の部位で表象される。たとえば、トマトを見るとき、その色を表象する部位と形を表象する部位は異なる。このように異なる部位で表象される諸特徴が何らかの仕方で結合されることによって、ひとつのまとまった知覚風景が構成されるのである。

(ウ)状況の異なる特徴が脳の異なる部位で表象されるとすれば、知覚もまた概念的であるようにみえる【Barsalou 1999】。赤いトマトを見るとき、トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるということは、それらが相互浸

透せずに文脈独立的な要素として同定されることにほかならないように思われる。じっさい、赤いトマトも、緑のトマトも、ともにトマトにみえる。トマトはどのような文脈にあっても等しくトマトとして知覚的に表象されるのではなかろうか。

　知覚が概念的であることは、知覚的な要素を組み合わせることによって、それまで一度も知覚したことのない物事を自由に想像できることからもうかがえる。じっさい、最近の脳科学の知見によれば、想像は知覚と同じ脳の能力によると考えられる。赤いトマトを想像するときに活性化する脳の部位は、それを知覚するときの部位と同じである。想像はようするに外界からの刺激によらない「知覚」である。われわれは知覚したことのないことがらを想像できるが、想像可能なことがらは適切な刺激さえ与えられれば知覚可能である。想像能力の限界と知覚能力の限界は一致する。したがって、想像が概念的であるなら、知覚もそうである。

　たしかに、知覚の内容を構成する要素がある程度の文脈独立性をもつことは認めなければならないだろう。しかし問題は、それが思考の内容を構成する概念的な要素と同じくらい文脈独立的かどうかということである。もし同じくらい独立的なら、知覚は思考と同程度にその要素の自由な組み換えが可能であろう。しかし、この点で知覚は思考に及ばないように思わ

れる。

たとえば、イヌが走ることと、ネコが眠ることを思考的に表象できる人は、イヌが眠ることも、ネコが走ることも思考的に表象できる。しかし知覚については、必ずしもそうはいえないように思われる。たとえば、イヌが走る場面やネコが眠る場面には何度も㋕ソウグウしたが、イヌが眠る場面やネコが走る場面には一度もソウグウしたことがない人は、イヌが走るのやネコが眠るのを知覚的に表象できるが、イヌが眠る場面はただある塊が横たわっているとしか知覚できないかもしれない。

知覚的に表象される諸特徴が脳の異なる部位で表象されるとしても、それらは思考的に表象される諸特徴ほど自由に組み合わせが可能なわけではない。知覚的に表象される特徴はそれが㋖チュウシュツされた元の諸文脈の「名残」をいくばくかとどめている。思考が概念的であるのにたいし、㋓知覚はそうではない。両者はその表象の様式が異なるのである。

ところで、最近の脳科学の成果によれば、脳における表象様式は知覚的なものだけであるように思われる【Barsalou 1999】。脳には、知覚的な表象をそうでない様式の表象に変換する過程は見いだされない。そうだとすれば、思考が知覚とは異なる表象様式をもつとすると、思考を脳のなかに

位置づけることはできなくなる。トマトが赤いという思考は、そのことを表す脳のある部位の活性化状態ではないことになる。しかしそれでは、いったい思考はどこに存在することになるのだろうか。

　ここで注目すべきは、思考の内容が文の内容とピッタリ一致することである。トマトが赤いという思考は「トマトが赤い」という文とまったく同じ内容をもつ。両者はともに概念的である。そうだとすれば、じつは、トマトが赤いと考えることは「トマトが赤い」という文を発することにほかならないのではなかろうか。そのような文を発することは、頭のなかにある思考を言語的に表出したものと考えられがちである。しかし、脳のなかに思考が存在しないとすれば、文を発することがじつは思考そのものにほかならないのではなかろうか【信原 2000】。

　たしかにわれわれは、たとえば「地球はまるい」という文を発さなくても、地球はまるいと考えているように思われる。しかしそれは、われわれの脳のなかにそのような思考を産み出す能力があるということであって、思考がそのまま脳のなかに存在するということではない。われわれは、脳によって「地球がまるい」という文が産み出されることから、その文と同じ概念的構造をもつ思考が脳のなかにあると考えてしまいがちである。しかしそれは、脳科学の知見からすれば、誤りだと思われるのである。

常識に反して、脳科学の知見からすれば、むしろ概念的な思考は発話ないし内語として脳の外に存在すると考えられる。非概念的な知覚は脳のなかにニューロンの活性化として存在するが、Ⓐ思考は概念的である以上、脳のなかには存在しえないのである。

（信原幸弘『脳と哲学』）

注　【　】内の注記は、筆者が参照した論文の著者名と発表年次である。

問一　二重傍線部㋐「ガンゼン」、㋑「シサ」を正しい常用漢字に改めよ。

問二　傍線部㋐の立場に立った場合、どのようなことがいえるか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　トマトの赤さを思考的に表象すると同時にその有様をイメージする場合は、知覚と思考は同一の表象様式であることになる。
ｂ　トマトが赤いと思う時にそのトマトの赤い有様が想像されても、それは思考的な表象とはいえない。
ｃ　一人の人間が得た知見は後世まで継承できるので、人類には知覚と思考の二種類の表象様式が生まれた。
ｄ　トマトの赤さを知覚的に表象することは、それを想像することを意味する。
ｅ　知覚と思考の二つの表象様式があるが、知覚的な表象を思考的な表象に変換する過程が脳にある。

問三　傍線部㋑はどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　各概念の組み合わせが自由であること。
ｂ　各概念の組み合わせが副次的であること。
ｃ　各概念の組み合わせが特殊性を有すること。
ｄ　各概念の組み合わせが普遍性を有すること。
ｅ　各概念の組み合わせが限定的であること。

問四　傍線部㋒はどのようなことをいったものか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　脳の異なる部位で表象されることは、知覚が相互浸透する必要があるので、概念的だといえる。

ｂ　状況の異なる特徴が表象される脳は状況によって著しく変化を来す構造を有するから、それによって知覚されたものは概念的だといえる。

ｃ　トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるということは、それが脳内において相互浸透することであり、したがって知覚は概念的だということになる。

ｄ　トマトが赤いという外界からの刺激は、思考の場合とは脳の別の部位で受け止めたものであるから、知覚は思考とは別の働きをすることになる。

ｅ　トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるとすると、それは文脈独立的であることになり、知覚も概念的であるといえる。

問五　傍線部㊁はどのようなことをいったものか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　知覚は、思考という行為を経ることによって概念化されることはない。

ｂ　知覚は、文脈からの独立性の有無だけでは判断することができないから、非概念的であるといえる。

ｃ　知覚は、思考ほどにはその内容の構成要素を自由に組みかえられないので概念的であるとはいえない。

ｄ　知覚は、その文脈を構成する要素が脳外に存在するから、概念的であるとはいえない。

ｅ　知覚は、思考と違って、外的な刺激によってのみ喚起されるので、概念的であるとはいえない。

問六　二重傍線部㋒㋓㋔㋕㋖のカタカナと同じ漢字を用いる語を、次のa～eから一つずつ選び、その記号を答えよ。

㋒　コウサツ

a　政治をサッシンする。
b　ボウエキマサツが生じる。
c　映画のサツエイ現場。
d　鋭いドウサツリョクがある。
e　競売にニュウサツする。

㋓　コウシ

a　ガイコウシセツダンを派遣する。
b　勉学にシショウをきたす。
c　シャカイフクシの重要性。
d　シボウコウに合格する。
e　直立不動のシセイをとる。

㋔　セイヤク

a　外国とメイヤクを結ぶ。
b　論理がヒヤクする。
c　御リヤクを授かる。
d　ヤクビョウガミにとりつかれる。
e　重要なヤクショクにつく。

㋕　ソウグウ

a　意欲をソウシツする。
b　文化をソウシュツする。
c　書物をハクソウする。
d　海でソウナンする。
e　動物のキソウホンノウ。

ⓚ　チュウシュツ

a　貨幣をカイチュウする。
b　チュウシンからお礼を述べる。
c　チュウセキへイヤ。
d　チュウカイギョウシャ。
e　チュウショウテキな絵画。

問七　波線部Ⓐはどのようなことをいったものか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

（次ページより解答欄）

問一

Ⓐ

Ⓘ

問二

問三

問四

問五

問六

Ⓤ

Ⓔ

Ⓞ

Ⓚ

Ⓚ

問七

第二講　「論証」を読む

Ⅰ　「A → x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A→x」という飛躍した部分があります。まずは、どこに飛躍があるかを見つけましょう。

①　主語（主部）→ 述語（述部）に飛躍がある場合。
②　修飾部（接続部）→ 被修飾部（文）に飛躍がある場合。

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探します。
※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もあります。

Ⅱ　論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となります。「A→x」のAの説明を求めましょう。

Ⅲ「論証」のフレームワーク

①「単純な論証」　A　→　B

根拠Aから主張Bが導かれている。

例文　A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

したがって、　**導出　↓**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　B**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがあります。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要があります。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」といいます。

②「**論証の連鎖**」　A → B → C

主張Aが根拠Aとなって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠Bとなって主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**主張　A　＝　根拠　A**

したがって、　**導出**　←

A子ちゃんは美人だ。　**主張　B　＝　根拠　B**

したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この形が「論証」の中では一番多いです。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になります。
その前の文は「根拠」となります。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

例文

A子ちゃんは美人だ。　**主張A**
＋　結合　　＝ **根拠**
私は美人が好きだ。　**主張B**

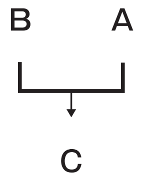
したがって、　**導出** ←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※31ページに説明した「隠れた前提」がある場合、この「結合論証」となります。
この形も「理由説明問題」ではよく出題されます。

※「Aのみ」「Bのみ」の解答は減点されます。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠　B**

したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になります。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多いです。

傍線部理由説明問題

傍線部の問題の２大パターンが前回の「傍線部説明問題」と今回の「傍線部理由説明問題」です。ではまずその形式から確認しましょう。その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、なぜか　説明せよ。
or
その理由を

というものです。この問題に対してもやはり一定のアプローチの仕方があるので、今回はその設問解法を学びましょう。

傍線部理由説明問題解法

―「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。

・文法的構造

・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。

・A→×

（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

・Aの説明

・「論証」のフレームワーク

（次ページより問題演習）

つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

一般的に家族は、「ありのままの自分」を受け入れ、認めてくれるような安らぎの場所が理想とされている。ただ存在するだけで無条件によろこばれ、本音を出し合える関係性。そこでは「偽りの自分」を作る必要性はまったくない。それが大多数の人間に共有された理想的な家族のイメージであろう。

しかし現在、多くの人が家族に対して本音を隠し、「ありのままの自分」を過度に抑制し、家族の求める役割を演じ続けている。そうしなければ、家族というシステムを維持することができず、相互に承認しあっている微妙な関係が壊れ、自らの居場所を失ってしまうからだ。しかもこうした不安から家族の承認が維持されている限り、そこには特に「認められている」というよろこびは生じない。

実のところ、このような偽りに満ちたコミュニケーションは、現代社会では家族以外の人間関係においても頻繁におこなわれている。

たとえば、仲間の承認を得るために自分の本音（ありのままの自分）を抑え、仲間の言動に同調した態度をとり続ける若者は少なくない。仲間の間で成立するコミュニケーションにおいて、リーダー格の人間の気分次第

で変化する暗黙のルールを敏感に察知し、場の空気を読み取りつつ、絶えず仲間が自分に求めている言動を外さないように気を遣っている。

　このようなコミュニケーションは「仲間であることを確認（承認）しあうゲーム」とも言い得るが、しかしその証は明確な役割や目的によるものではなく、空虚なものでしかない。価値のある行為によって認められるわけでも、愛情や共感によって認め合うわけでもない。それは場の空気に左右される中身のない承認であり、以下、このような承認をめぐるコミュニケーションのことを、「空虚な承認ゲーム」と呼ぶことにしよう。

　家族や仲間関係において、相手の愛や信頼に疑いを抱くとき、自分は受け入れられているのかどうか、認められているのかどうか、強い不安に襲われるようになる。そのため、自分の考えや感情を過度に抑制し、本当の自分を偽って家族や仲間に同調し、無理やりに承認を維持しようとする。それはただちに「空虚な承認ゲーム」となり、必ず自己不全感がつきまとう。そして少しでもコミュニケーションに齟齬（そご）が生じ、その関係が行き詰まれば、自己否定的感情に襲われ、絶望的な気持ちになるのである。

　[1]「空虚な承認ゲーム」が最も目立ったかたちで見られるのは、思春期における学校の仲間関係であろう。かつてこの関係は、親に認められなくとも、「ありのままの自分」を受け入れてくれる安息の場所であった。価

値観を共有できる仲間たちと相互に承認しあうこと、それは親の承認という呪縛から逃れる上で、とても大きな意味を持っていた。しかし、いまや思春期における多くの仲間関係は、本音をさらけ出せる場所ではなく、「ありのままの自分」を抑制せざるを得ない閉塞感が漂っている。

そもそも思春期の生活のほとんどは家庭と学校の往復であり、交友関係も同級生やサークルの仲間に限られている。このような小さな人間関係のなかで、彼らは生活の大半を過ごす場所を守るために、仲間と接している間は絶えず場の空気を読み、仲間の気に障りそうな言動は極力避けている。相手の反応を少しでも読み間違えれば、仲間との関係は容易に破綻し、仲間はずれになり、「友だち」という立場を失ってしまうからだ。そのため、仲間との間に感じ方や考え方のズレが生じても、本音を表には出せなくなっている。

少数の仲間とうまくいかなくなっても、他の友だちを見つければよい、別の仲間に入ればよい、そう思うかもしれない。しかし、社会学者の土井隆義によれば、現在の学校におけるクラス内での仲間集団には一定の階層(身分制度)があり、誰もが自分の属するグループの仲間以外は、友だちの対象とは見ていない。これは一般に「スクール・カースト」と呼ばれている。

この問題について、臨床心理士の岩宮恵子は次のような興味深い事例を報告している。

カウンセリングを受けに来たある中学二年の女子Hは、クラスのなかで一番上のグループとされる、おしゃれで洋服や髪型に気を遣う派手なグループに属していたが、仲間はずれにされたことをきっかけに、教室に入りにくくなり、保健室で過ごすようになった。他のグループにはHを受け入れようとする生徒たちもいるのだが、彼女たちは位の低い地味なグループであるため、Hは絶対にいやだと言う。[2]その子たちが話しかけてきても、「話しかけんな！」と拒絶してしまうほどだ。一方、自分を排除した仲間たちに対しては、ご機嫌をうかがうような、卑屈な態度を続けており、無視されたり、冷たくあしらわれても、元のグループに戻りたいと切望している。

岩宮恵子によれば、これはHに限らず、多くの思春期の女の子に共通する傾向であり、「彼女たちは、自分が属しているグループの数人の人たちには、信じられないくらいの労力を使って関係を維持することに［　A　］としているのに、自分が重要と思わない人に対しては、ほんとうに無神経な言葉で傷つけることがある」（『フツーの子の思春期』）。

おそらくHの苦悩の根幹には、自己の存在価値が下落することへの恐怖

がある。孤独だけが問題なら、別のグループの人間に優しくされれば、その苦しみはかなり癒されるはずだが、彼女にはまったくその様子が見られない。むしろ、身分が低いグループと付き合えば自分の存在価値が落ちる、それだけは避けたい、という激しい抵抗感がある。そのためどんなに苦しくても、自分の属する仲間との間で「空虚な承認ゲーム」を繰り返してしまうのだ。【 a 】

中学生ぐらいの年齢ではまだ交友関係も狭いため、家族や友人関係など、身近な人々の承認に固執してしまうのも無理はないし、それは昔もいまもさほど変わらないだろう。しかし、スクール・カーストのような現象には、身近な人々のなかにさえ線引きをし、あえて交友関係を広げまいとする心理が垣間見える。線引きをした外側の人間は、たとえ同じクラスにいても「見知らぬ他者」と同じであり、自分を認めてほしい相手ではないのである。

【 b 】

ここ数年、進学や就職の際に都会へ出て、新しい世界や人間に出会いたい、というような、かつて多く見られた若者が減少しつつあるのも、こうした心理を反映している。マーケティング・アナリストの三浦展（あつし）によれば、生まれ育った地域（地元）を離れず、地元で進学や就職をし、大人になっても小学校や中学校の頃からの仲間と付き合い続ける、そういう地元志向

の若者が増えているという（『ニッポン若者論』）。なにしろ都会に行かなくとも、華やかな消費生活を享受できるし、携帯によって、古くからの仲間ともつながり続けることができるのだ。【 c 】

だがこれは、身近な人間関係だけを重視し、見知らぬ人々との出会いにはあまり期待もしていない、ということでもある。社会学者の宮台真司が、「仲間以外はみな風景」（『まぼろしの郊外』）と表現しているように、仲間以外の人間には関心がなく、見知らぬ人間はいてもいなくてもどうでもいい、と感じているのである。【 d 】

家族や仲間の承認のみを求め、それ以外の人々の承認を求めないのは、多くの人間の賞賛を求める野心とは無縁な、ある意味で堅実な生き方のように思えるかもしれない。理解してくれる人が少しでもいればそれでいい、という思いも十分に理解できる。しかし、見知らぬ大勢の人々の承認など不要だとしても、自らの行為に価値があるのかないのか、正しいのか間違っているのかについて、身近な人間から承認されるか否かのみで判断し、それ以外の人々の判断を考慮しないとしたら、それはとても危険な考え方である。【 e 】

たとえば、自分の会社の内部で不祥事が起き、大勢の人々に知らせなければ危険がある場合でも、社内で上司や同僚からの承認を維持するために、

会社の隠蔽工作に荷担してしまうかもしれない。あるいは、あまり素行のよくないグループに関わり、仲間の承認を得るために万引きをしてしまう人もいる。この場合、もし見知らぬ大勢の人々の考えや承認を考慮するなら、そのような行為に及ぶことはできないはずだ。

　このように、見知らぬ他者の承認を無視することは、たとえ身近な他者の承認だけで十分だという謙虚な気持ちに発するとしても、結果的に見知らぬ他者を排除することになりかねない。

　また、積極的にこうした排除に荷担することで、自分の存在価値をより一層高めようとする場合もある。仲間と一緒に他の人々の欠点をあげつらい、蔑視することで、自分たちだけは特別だ、というような一段高い位置に身を置くことができるからだ。先に例を挙げた女子中学生Ｈの地味なグループへの蔑視も、こうした心理から生じている。それは、自分とは無関係に思える人々を蔑(さげす)むことで、自らの存在価値の底上げを図ろうとする行為にほかならない。

　求められているのは「自分は価値のある人間だ」という証であり、その確証を得て安心したいがために、身近な人々の承認を絶えず気にかけ、身近でない人々の価値を貶(おとし)めようとする。見知らぬ他者を排除することで、自らの存在価値を保持しようとする。たとえそれが悪いことだと薄々気づ

いていても、仲間から自分が排除されることへの不安があるため、それは容易にはやめられない。そして[3]底なしの「空虚な承認ゲーム」にはまってしまうのだ。

（山竹伸二『「認められたい」の正体』より。文章を一部改変した。）

問一　傍線部１「「空虚な承認ゲーム」が最も目立ったかたちで見られるのは、思春期における学校の仲間関係であろう」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　そもそも学校とは様々な感じ方や考え方を持った思春期の若者が集まる場であるため、たとえ同じグループの仲間であっても考え方にズレが生じるのは当然だから。

イ　学校という場では、先輩・後輩といった上下関係が非常に重視されるので、スクール・カーストのような上下関係も発生・定着しやすい前提が整っているから。

ウ「ありのままの自分」を受け入れて欲しいと願う思春期の同世代が集まることで、同じ種類の不安や悩みを共有できる仲間が見つかりやすい環境が生まれるから。

エ　見知らぬ他人などどうでもいいと考える人も少なくない現代社会においては、思春期の若者にとって自己の存在価値を認めてくれるのは学校で知り合った仲間しかいないから。

オ　多くの時間を学校で過ごす思春期の若者は、社会との接点が少ない上、自己の存在価値を認め合う交友関係も必然的に学校の仲間に限定されてしまうから。

問二　傍線部２「その子たちが話しかけてきても、「話しかけんな！」と拒絶してしまう」とあるが、この女子生徒Ｈはなぜこうも強く拒絶するのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア「偽りの自分」を演じることで、自らの存在価値が下落してしまうという恐怖心を覆い隠したいから。

イ　他者を蔑んだり、排除したりすることで、相対的に自己の存在価値を高く保ちたいという心理が働くから。

ウ　自分が仲間として認めない者は、どうでもいい存在でしかなく、無価値なものとしか思っていないから。

エ　スクール・カーストでは、下から上の階層へ話しかけること自体が暗黙のうちにタブー視されているから。

オ　たとえクラスメートでも、関心のない者はみな風景と同じであり、対等な友人とは見なさないから。

問三　空欄［A］に当てはまる語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　悄然　イ　粛々　ウ　敢然　エ　汲々　オ　憮然

問四　傍線部３「底なしの「空虚な承認ゲーム」にはまってしまう」とあるが、なぜ底なしで空虚になるのか。その理由を、本文全体の内容を踏まえ、つぎの形式に従って、三十五字以上、四十五字以内で記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

［　　　　　　　　　　］から。

問五　つぎの中から本文の内容に合致するものを二つ選び、解答欄の記号を答えよ。

ア　大勢の人々から承認されることを内心では望みつつも、それを最初から諦め、身近な仲間からの承認だけで妥協している現代の若者は、非常に危険な状態にあると言わざるを得ない。

イ　本当の自分を受け入れてくれる仲間の存在は、思春期の若者にとっては得難いものであるため、一旦その仲間を手に入れてしまうと、今度はそれを逃すまいと必死になり、「偽りの自分」を演じてしまうことすら厭わなくなる。

ウ　リーダーの意向や場の空気を読むことに絶えず神経を使い、「偽りの自分」を演じてまで承認を得たとしても、常に自己不全感がつきまとうため、積極的に交友関係を広げようとしない若者が近年目立ってきている。

エ　仲間からの承認を得ようと若者が躍起になる原因は、「自分は価値ある人間だ」という証が欲しいからであり、そのために自分を偽ることは厭わないが、自分を承認してくれる別の仲間を探そうという発想は見られない。

オ　「ありのままの自分」を受け入れてくれる友人や仲間が見つからないというのは、今日の学校という場にはありがちな問題であるが、現代社会では家族においてもそのような問題が発生している。

カ　自分を理解してくれる人が少しでもいればそれでいいという謙虚な姿勢をとりがちな現代の若者は、その謙虚さゆえ自己主張ができず、それが常にリーダーの言いなりになるスクール・カーストのような問題を生み出す原因にもなる。

問六　つぎの文章は、本文中のある段落に続くものである。どの段落の後に入れるのが最も適切か。本文中の【 a 】～【 e 】より選び、解答欄の記号を答えよ。

これは思春期独自の問題というより、若い世代を中心に広く見られる傾向でもある。多くの人は思春期を終えて大学生や社会人になっても、身近な人々の直接的な承認にこだわる点では変わりなく、承認の対象を見知らぬ他者へ広げようという姿勢があまり見られない。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

35

から。

問五

問六

第三講　「心情」を読む

「文芸的文章」である「小説文」や「随筆文」には登場人物や筆者の心情を把握する問題があります。今回は「心情」のとらえ方を学びましょう。

Ⅰ　単純な心情

原因　↓　心情　↓　結果

※　心情把握問題の基本形です。
※　この場合は心情が書いてないことが多いため、原因と結果から推測して心情を把握する問題になっていることが多いです。

Ⅱ　心情の変化

原因Ａ　→　心情Ａ　→　結果Ａ　→　原因Ｂ　→　心情Ｂ　→　結果Ｂ

※　心情把握問題で一番有名な問題です。

※　心情Ａから心情Ｂへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要があります。

Ⅲ　結合原因の心情

原因Ａ
＋
原因Ｂ
↓
心情
↓
結果

※　原因Ａだけ捉えて答えようとすると間違いになる選択肢が多いです。

※　原因Ｂは**「リード文」「会話文」「心中文」「過去シーン」**などにある場合が多いです。

Ⅳ　心情の交錯

原因Ａ → 心情Ａ
＋
原因Ｂ → 心情Ｂ
→ 結果

※　分析が一番難しい問題です。

※　心情Ａの原因が原因Ｂになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多いです。

心情把握問題解法

―「心情」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・原因 → 客観的事態や主観的事情
・心情 → ⊕心情や⊖心情
・結果 → 行動や反応や発言

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

（次ページより問題演習）

次の文章は、井伏鱒二(いぶせますじ)の小説「たま虫を見る」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

おそらく私ほど幾度も悲しいときにだけ、(注1)たま虫を見たことのある人はあるまいと思う。

よその標本室に行ってみて、そこの部屋で私達(たち)はおびただしい昆虫に出会(でくわ)すであろうが、たま虫ほど美しい昆虫を発見することは出来ないのである。私達はこの昆虫の死骸(しがい)の前に立ち止(ど)まって、或(あ)るいは感動の瞳(ひとみ)をむけながら囁(ささや)くであろう。

「めったに見たことのない虫だが、これは未(ま)だ生きているのではないかね?」

「死んじまっても羽根の色は変(かわ)らないらしいんだよ。」

「この色は幸福のシンボルだそうだよ。書物にそういって書いてあるんだ。」

「何(ど)ういって鳴く虫だろう?」

「まるで生きているようじゃないか!」

——ところが私の見たのは標本室のではなくて、生きているやつなのである。

※①私が十歳の時、私の兄と私とは、叔母につれられて温泉場へ行った。叔母は私の母よりも以上に口やかましい人で、私があまり度々お湯へ入ることを厳禁して、その代(かわ)りに算術の復習を命じた。そのため私は殆(ほと)んど終日、(注2)尺を里・町・間になおしたり、(注3)坪を町・段(たん)・畝になおしたりした。

或(あ)る日、私は便所の壁に（村杉正一郎のバカ）というらくがきを発見した。村杉正一郎は私の兄と同級で級長をしていたので、兄は正一郎を羨(うらや)んだものに違いなかった。けれど温泉場は私達の学校から幾十(注4)哩(まいる)も隔ったところにあったので、村杉正一郎や彼の知人が、便所のらくがきを見る筈(はず)はなかったのである。私は兄の(ア)浅慮を全く嘲笑(ちょうしょう)した。

「叔母さんに言いつけてやろう。」

「言ったらなぐるぞ！」

兄は実際に私の頬(ほお)をなぐった。私は木立ちの中に駆け込んで、このことは何うしても叔母に言いつけなくてはならないと考えながら大声に泣いた。この悲しい時、私の頬をくっつけている木の幹に、私は一匹の美しい虫を見つけたのである。私は蟬(せみ)を捕える時と同様に、忍び寄ってそれを捕えた。そしてこの虫は何ういって鳴くのであろうかと、(注5)唖蟬(おしぜみ)をこころ

みるときと同様にその虫を耳もとでふってみた。

美しい虫であった。羽根は光っていた。私はこの虫を兄にも見せてやろうと思ったが、兄の意地悪に気がついた。叔母は私が算術を怠けたといって叱(しか)るにちがいなかった。誰(だれ)にこの美しい虫を見せてよいかわからなかった。A<u>私はもとの悲しさに返って、泣くことをつづけたのである。</u>

「何故(なぜ)この虫は折角(せっかく)こんなに美しくっても、私が面白い時に飛んで来なかったのだろう。」

それから十幾年もたって、私は再びこの昆虫を見つけたのである。すでに私は大学生になっていて、恋人さえ持っていた。恋人は美しく且つ可憐(かれん)で、彼女は私と一しょに散歩することを最も好んだ。

郊外の畑地は全く耕されていなかったので、彼女が田舎へ出発してしまう前の日にも、私達はその畑地を野原とみなした。積み重ねた煉瓦(れんが)と材木とは、私達の密会をどの家の二階からも電車の窓からも見えなくした。

「きっと、お手紙下されば、私はほんとに幸福ですわ……空があんなに青く晴れているんですもの。」

彼女は日常は極めて快活であったが、恋愛を語ろうとする時だけは、少なからず(イ)<u>通俗的</u>でまた感傷的であった。そして物事をすべて厳密に約束

する癖があった。

「明日は午後二時三十分にあそこで待っていますわ。」

「僕等(ら)は三時まで学校があります。」

「では三時三十分頃(ころ)、そしてきっとお待ちしていますわ。」

私は決心して彼女の肩の上に手を置いた。そのとき、急にはその名前を思い出せないほどの美しい一ぴきの昆虫が、私のレインコートの胸にとまっていたのである。彼女はすばやく指先でその昆虫をはじき落(おと)してしまったので、私は周章(あわ)てて叫んだ。

「たま虫ですよ！」

しかし最早たま虫はその羽根を撃ちくだかれて、腹を見せながら死んでいた。私はそれを拾いとろうとしたが、彼女はそれよりも早く草履でふみにじった。

「このレインコートの色ね。」

そして彼女は私の胸に視線をうつしたのであるが、私は彼女の肩に再び手を置く機会を失ってしまった。私達はお互(たがい)に暫(しばら)く黙っていた後で、私は言った。

「あなたは、このレインコートの色は嫌いだったのですね！」

「あら、ちっともそんなことありませんわ。たま虫って美しい虫ですも

の。」

「でも、あなたはそれをふみつぶしちゃいました。」

「だってあなたの胸のところに虫がついていたんですもの。」

B私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである。

牛込（うしごめ）警察署は、私を注意人物とみなした。私が学生でもなく勤め人でもなく、そして誰よりも貧困であったからなのであろう。

呼び出しのあった日に、私の友人は顔を剃（そ）ったり風呂（ふろ）に入ったりしてから、私の代りに警察署へ出頭してくれた。そして彼の報告によれば、私が街で立ちどまっているところを写した（注6）キャビネ型写真を示されたというのである。私は何時（いつ）の間に写されたかそれを知らない。写真では私が冬の（注7）インバネスを着て夏の（注8）ハンチングを冠（かぶ）って（これは最近の私の服装である）（注9）エハガキ屋の飾り看板を顔をしかめながら眺め入っているところだそうだ。そうして写真の横のところには朱でもって——危険思想抱懐せるものの疑いあり——と記入されていたという。

私はインバネスを着て外に出た。私は牛込署へ出頭するのではなくて、

エハガキ屋の店先へ行ったのである。そして飾り看板を見上げながら顔をしかめてみた。飾り看板の硝子（がらす）の中には、数枚の裸体画と（注10）活動女優の絵葉書とが入れてあった。たしかに私はこの姿勢でもってこの表情で……

「ここに虫がいる！」

たま虫が、硝子の破れ目に一本の脚をかけてぶら下（さが）っている。私は手をのばしてそれを捕えようとした。けれど今も私の直（す）ぐ後ろで警察の人達がカメラをもって私をねらっているかもわからない。彼等は、私が昆虫を摑（つか）まえようとして手をのばしたところを、絵葉書を盗もうとしている姿勢に写すかもしれない。私は随分ながいあいだたま虫を眺めながら、顔をしかめる表情を続けてみた。C<u>硝子にうつる私の顔は、泣き顔に見えた。</u>

「この昆虫はどうして斯（こ）んなに私が不機嫌なときに見つかるのだろう？」

就職口が見つかったので、叔母にそのことを報告してやると、彼女から祝いの手紙が来た。彼女はかつて私達を毎年温泉場へつれて行ってくれたところの叔母であって、今は修道院に入っている。彼女の手紙は実にくどくて、手紙の終（おわ）りには必ず数行の格言が書いてあったのだ。今度は次のように書いてあった。

「貧しくとも正しく働け。悩むとも、聖霊とともにそれが如何に正しき悩みなるかを知れよ。絶望はいびつなる悩みであることを知れ。」

私は叔母のこの平凡な文章を嘲笑したのではなく、寧ろ彼女の(ウ)さしでがましさによって力づけられ慰められるのを知ったのである。しかし私の勤めぶりは上等ではなかった。

(旧古書林(注11) 校正係)

自分のこの肩書きを私は自慢にしていたわけではなかったのだが、勤めてから幾らもたたない時、編輯員の松本清太郎は私の頭をなぐった。私が生意気で校正が下手だというのだ。私は自分が喧嘩に弱いと信じていたので、彼に対して反抗しなかった。

「…………」

俺は弱いな？　そういうことを思いながら彼になぐられたのである。こんな場合には、なぐられた者の方が必ずつまらなく不愉快になるに相違なかった。私は幾度もそれとは反対の考えを持とうと努力したのであるが、それは駄目であった。

私は髪床屋へ行った。そこを出て、冷たい手で頤を撫ぜてみた時、私は電信柱の根元に一匹のたま虫が死んでいるのを発見したのである。

「いまに蟻が群るだろう。」

私はその昆虫を拾いあげて、それを電信柱にとまらせてみた。けれど動かなくなった彼の脚は、木肌のどの窪（くぼ）みにも摑（つかま）ることをしなかった。私は彼を今度は木肌の割れ目にぶらさがらせようとした。ところが私はあまりデリケイトに彼を取扱（とりあつか）わなかったので、枯渇した彼の前脚を折ってしまった。※②私は（注12）ゲラ刷りの綴針（とじばり）をぬきとって、彼を標本みたいに電信柱にとめつけた。

※③「何うだ、生きているように見えないかね？」

そうして私は、生きているように見えるたま虫を袖（そで）のなかにしまって、（注13）停留場の安全地帯に入った。人々は電車の来る度毎（ごと）に私を後ろにおしのけ、電車で行ってしまうと私を前にゆずった。D私は人を押しのけはしないのだと心のなかで思いながら、実は少しばかり人を押しのけながら割り込む必要を覚えた。

※④数日たって或る夜更けに私はすでに寝床に入っていたのであるが、袖のなかのたま虫を見てみることにした。その夜、私は（注14）宝焼酎（たからしょうちゅう）をのんだので、幾ら水をのんでも咽（のど）のかわく夢をみて眠れなかったからである。

※⑤私はたま虫のことを忘れてしまっていたのだ——たま虫が着物の袖

のなかで少量の醜悪な粉末となっているのを発見して、私はその粉末を窓の外にふきとばした。私は夢ではなしに事実、冷水（おひや）をのみながら考えた。「今度たま虫を見ることがあるとすれば、それはどんな時だろう――私の不幸の濃度を一ぴきずつの昆虫が計ってみせてくれる。」

再び夢で水をのむとき、私は水をのみながらオルガンを上手にひいていた。最近私は、若（も）し失職したならば叔母に依頼して、牧師になるように手続きしてもらおうと思っていたのである。

注1　たま虫――光沢を持つ甲虫の一種。金緑色に赤紫色の二本の縦線がある。また、光線の具合によって色が変わって見える染め色・織り色をたま虫色という。

注2　尺――長さの単位。「里」「町」「間」も同じ。

注3　坪――面積の単位。「町」「段」「畝」も同じ。

注4　哩――距離の単位。一哩は、約一・六キロメートル。

注5　唖蟬――鳴かない蟬、雌の蟬。

注6　キャビネ型――写真の大きさの一つ。

注7　インバネス――和服用に流行した袖なしのオーバーコート。

注8　ハンチング――前にひさしのついた平たい帽子。

注9　エハガキ屋――絵葉書を売る店。二〇世紀初頭に流行した。

注10　活動――「活動写真」の略称で、映画の旧称。

注11　校正係――印刷の工程で、文字の誤りや不備などを正す仕事。

注12　ゲラ刷りの綴針――「ゲラ刷り」は校正用に印刷物の試し刷りをしたもの。「綴針」はそれを綴(と)じるための針。

注13　停留場の安全地帯――路面電車に乗り降りするための場所。

注14　宝焼酎――焼酎の銘柄の一つ。

問一　傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　浅慮を全く嘲笑した

①　短絡的な考えに対して心の底から見下した
②　卑怯（ひきょう）なもくろみに対してためらわず軽蔑（けいべつ）した
③　粗暴な行動に対して極めて冷淡な態度をとった
④　大人げない計略に対して容赦なく非難した
⑤　軽率な思いつきに対してひたすら無視した

(イ)　通俗的

①　野卑で品位を欠いているさま
②　素朴で面白みがないさま
③　気弱で見た目を気にするさま
④　平凡でありきたりなさま
⑤　謙虚でひかえ目なさま

(ウ)　さしでがましさ

①　人の気持ちを酌んで自分の主張を変えること
②　人のことを思い通りに操ろうとすること
③　人の事情に踏み込んで無遠慮に意見したがること
④　人の意向よりも自分の都合を優先したがること
⑤　人の境遇を自分のことのように思いやること

問二　傍線部Ａ「私はもとの悲しさに返って、泣くことをつづけたのである」とあるが、その時の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 兄になぐられて木立ちの中に駆け込んだ時の悔しさが思い出され、誰とも打ち解けられずひとりでやり過ごすしかない寂しさをかみしめている。

② 抵抗もできずに兄から逃げ出した時の臆病（おくびょう）さを思い返し、ひとりで隠れていても兄や叔母にいつ見つかるかわからないという恐怖におののいている。

③ 兄に歯向かうことができなかった情けなさを改めて自覚し、自分の切実な望みが兄や叔母によって妨げられることへの憤りを感じている。

④ 兄の粗暴な振る舞いに対する怒りに再びつき動かされ、仕返しをしようとしても叔母への告げ口しか思いつかない無力感に苦しんでいる。

⑤ 兄の過ちを正面から諭さなかったことを後悔し、自分の行動の意図が兄はもちろん叔母にも理解されないだろうという失望感に襲われている。

問三　傍線部Ｂ「私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである」に至るまでの二人のやりとりの説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 私は、幼い時から好んでいるたま虫が邪険にされたことを悲しみ、恋人の優しさに疑いを抱いて発言しているが、恋人は、自分よりもたま虫を大切に扱うかのような私の態度に驚き悲しんでおり、互いに不信感を持ち、うらめしいような気持ちになっている。

② 私は、悲しい体験を思い出させるたま虫が恋人との密会時に現れたことにとまどい、過去の経験にとらわれているが、恋人は、たま虫を私のコートにとまった虫としてはじき落としたのにその配慮に気づかない私に失望し、互いに相手を理解できない気持ちになっている。

③ 私は、肩に置いた手をたま虫を口実にして恋人に振り払われたと考え、ショックを受けているが、恋人は、その私をなだめようとしたのに私がよそよそしい態度をとり続けているので意外に思い、互いに相手の態度にとまどい、責めるような気持ちになっている。

④ 私は、幸福のシンボルとしてのたま虫が恋人との密会時に現れたので気持ちを高ぶらせ、それを恋人に伝えようとしているが、恋人は、私がいったん肩に手を置きながらたま虫に気をとられたことに傷ついており、互いの言葉が通じないことに苛立（いらだ）つ気持ちになっている。

⑤ 私は、突然現れた美しいたま虫を無慈悲に扱われたことに驚き、恋人を責めるような発言をしているが、恋人は、大切な二人の時間を邪魔したたま虫をはじき落としたのに相手が理解してくれないと思い、互いに落胆し、非難するような気持ちになっている。

問四　傍線部C「硝子にうつる私の顔は、泣き顔に見えた」とあるが、なぜそう見えたのか。その理由として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 飾り看板を眺め入っていただけのところを写真に撮られて、警察に疑いをかけられてしまった自分の立場を意識するあまり、思いがけず見つけたたま虫を摑まえることまでためらってしまう自分に情けなさを感じているから。

② 美しいたま虫を見つけたにもかかわらず、貧乏で社会的にも不安定な立場にあるとの理由で警察に疑いをかけられてしまう可能性があるため、たま虫を摑まえたいという長年の希望をかなえられない自分に悔しさを感じているから。

③ たま虫を摑まえようとしていたために警察に誤解されたのだと気がついたが、今おかれている立場ではそれを説明しても誤解は解けないと予想して、たま虫に手をのばすことができない自分に無力さを感じているから。

④ 自分が写真に撮られた理由を確認するという目的があって来たのにもかかわらず、警察に疑われている立場を忘れて突然現れたたま虫の美しさに心を奪われ、ながいあいだたま虫を眺めている自分にふがいなさを感じているから。

⑤ 警察に注意人物とみなされ出頭を命じられるという困難な状況に追い込まれている立場を意識するあまり、以前から好きだったたま虫を偶然に発見しても、その美しさを感じる余裕を持てない自分に寂しさを感じているから。

問五　傍線部Ｄ「私は人を押しのけはしないのだと心のなかで思いながら、実は少しばかり人を押しのけながら割り込む必要を覚えた」とあるが、この時の私の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分と他人の幸福を比較しても仕方がないと知っているので、他人以上に幸せになろうとしたり、他人の幸福を妨げたりはするまいと思いながら、世の中で自分の幸せを見つけるためには、何か行動を起こして他人とぶつかる必要もあると気づきはじめている。

② 自分の出世のために他人を踏み台にしてもどうしようもないと知っているので、自分に有利な状況を作るようなことはしたくないと思いながら、自分の態度をわずかながら変化させることで、周囲とのより良い関係を保てるという可能性に気づきはじめている。

③ 自分自身は弱い人間だと知っているので、反抗せずに負けて不愉快な状況になるのは仕方がないとあきらめ、人に対して強く自己主張はするまいと思いながら、社会の中で生きていくためには、自分の立場も守らなければならないことに気づきはじめている。

④ 自分は正当な助言や指導を与えられれば素直に従う性格だと知っているので、他人の言葉を受け入れて自らの行動を決めようと思いながら、他人の言葉の裏には自分を支配したい欲求もあるのだから、時にはそれをはねのけた方がよいとも気づきはじめている。

⑤ 自分よりも強い相手には逆らわないようにするのが無難だと知っているので、あらかじめ自分の限界を決めて新しいことには踏みきるまいと思いながら、人々と共に生きるためには相手の気持ちに配慮しつつ、自分の望む形を通すことも大切であると気づきはじめている。

問六　この文章における表現の特徴の説明として適当なものを、次の①〜⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 過去の回想として描かれた各部分の内部は、まず語り手が出来事の概略を述べ、次に登場人物の私に寄り添ってその視点からそれぞれの出来事を主観的に語るという手法をとっている。

② ※①の行以降は、小学生時代、大学生時代、無職時代、校正係時代における私の「悲しいとき」の状況を、羽根の色が幸福のシンボルとされるたま虫との関わりを通して描くという構成になっている。

③ ※②の「私はゲラ刷りの綴針をぬきとって、彼を標本みたいに電信柱にとめつけた」という描写には比喩(ひゆ)表現が用いられていて、たま虫に自分自身の境遇を投影する私の心境が効果的に描き出されている。

④ ※③の行と次の行で「生きているように」と繰り返すことで、死んだように生きていると感じている私と比べ、より生き生きとして見えるたま虫の様子を明示的に表している。

⑤ ※④から始まる最終場面で四回繰り返して述べられている「水をのむ」ことは、たま虫が粉末になったことと対比されていて、たま虫の乾いた死を引き合いに出して、みずみずしさを保っている私の生を強調している。

⑥ 幸福についての私の考え方の変化を、※⑤の行と次の行の「たま虫のことを忘れて」「醜悪な粉末となっているのを発見し」「その粉末を窓の外にふきとばした」という一連の描写を通して象徴的に表現している。

（次ページより解答欄）

問一

(ア)

(イ)

(ウ)

問二

問三

問四

問五

問六

第四講　「様々な設問」を解く

次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

個人の自由を至上の価値として見出したことが、近代社会のひとつのメルクマールであろう。ミシェル・フーコーによれば、西洋における自由の概念には、二つの源泉がある。ひとつは、人権思想に基づく自由、法理念としての自由である。すべての個人は、本来的に自らの手元にある種の自由を保持しており、その一部はゆずり渡すことも可能だと考えられている。もうひとつは、統治から離れることによって自由が生まれるという発想である。こちらの自由は、法権利の行使として概念化されるのではなく、単純に、統治者からの被統治者の独立として知覚される。前者は、アイザイア・バーリンが「積極的自由」と呼んだ類型に対応しており、主として、啓蒙（けいもう）主義の中で主張された。後者は、消極的自由であり、経済学へとつながっていく自由である。どちらの観点においても、近代の初期は、自由への闘い、自由を獲得するための闘いによって特徴づけることができる。

だが、今日、われわれは十分に自由な社会を生きている。二〇世紀末期

以降の現代社会は、許容度の非常に高い社会、ある意味で寛容な、したがって自由な社会である。このことは、今日では、「人権」（自由の第一の類型）の内実が、まさに禁止の中の禁止（自由の第二の類型にとっての最後の障害物）とも見なすべき、モーセの十戒を蹂躙する権利にまでなっているという事実のうちに、顕著に現れている。たとえば、プライヴァシーの権利は、ある意味で、姦淫の権利である。幸福を追求する権利や私的所有権は、盗みの権利である。報道の自由や表現の自由は、嘘をつく権利であると言えなくもない。そして、信仰の自由は、それこそ、端的に1グウゾウ崇拝の権利、偽の神を崇める権利以外のなにものでもない。

　現在の人権が十戒を蹂躙する権利になっているという、ウィットのきいた解釈は、スラヴォィ・ジジェクによるもので、もちろん、これはいささか言い過ぎではあるが、真実の一面をついている。いずれにせよ、人権には、法や権力がタッチすることができないグレイゾーンがあり、このグレイゾーンを利用すれば、人は容易に、「十戒」等の伝統的な［　ア　］に違反することができる。Xこれほどまでに、われわれの社会は許容的である。

　ということは、われわれは、啓蒙主義の時代に、西洋の人民と知識人が夢見た自由な社会をすでに獲得している、ということになるのだろうか。

しかし、何かがおかしい。何かがちがう。

＊　＊　＊

ミヒャエル・エンデの短編に、「自由の牢獄」と題した短い寓話がある。この寓話は、民から「インシアッラー」と呼ばれている盲目の男が、教主（イスラム国家の最高権威者）に話して聞かせた経験談の形を取っている。

この男によれば、彼は若い頃、はぶりのよい商人だった。そして自らの成功は、自身の能力と2ケンメイさのせいだと信じ、うぬぼれていた。そのため彼は冒瀆的になり、神（アッラー）が預言者を通じて［　イ　］した法をないがしろにするまでになっていた。たとえば彼は、断食の月すらも無視して、飲み食いして過ごした。

その彼の前にあるとき美しい女が現れ、彼を3ユウワクした。この女は、彼女を求める彼にこう言う。「私を好きなようになさいませ。でもその前にお誓いください。あなたさまが今日もこれからも従われるのは、あなたさまの意志であることを」と。彼女の要請に応えて、彼は彼自身の眼にかけてこのことを誓った。そして、いよいよ彼はこの不思議な美女を抱こうとするのだが、その瞬間、彼の身体は宙に浮き、星の世界の闇の中へと飛び出してしまう。実は、女は、魔王イブリースだったのだ。気がついた

ときには彼は、巨大な円形の丸天井に[4]オオわれた建物の真ん中にいた。

　この建物の円形の壁には、無数の閉じられた扉がある。彼は、ここからすぐに逃げだそうとしたが、どうしても逃げだすことができない。扉はありあまるほどあるのだから、脱出口はある。が彼の逃亡を妨げたのは、まさにこの脱出口なのだ。扉が多すぎるのである。どの扉から出ていくべきか、彼はその理由を見出すことができない。一見したところ、どの扉も同じに見える。だが、ある扉の向こうにはライオンが待ち構えているかもしれない。また別のある扉は財宝への道に通じているかもしれない。しかし、これらのことをあらかじめ知ることはできない。結局、彼はどの扉を開けるかを決定することができず、そもそも扉に鍵がかかっているのかどうかすらも確認することができない。

　やがて彼はあきらめ、扉への関心もうすれていった。要するに、[Y]あれほど脱出することを渇望していた彼が、やがて何も欲しなくなったのである。

　ここで右の寓話から引き出しておきたい教訓は、通常は解放を意味する「自由」が、まさに束縛と感じられることもある、ということである。完全な解放と完全な束縛が同じものになってしまうという［　ウ　］が、この寓話の教訓である。

＊　＊　＊

だが、なぜ自由なのに不自由なのか。なぜ、十分に自由があるとき、不自由を感じてしまうのか。Z自由が不自由へと反転するのは、どのような機制によるのか。問題提起のために、もう一度ジジェクのエッセイからジョークを借りてこよう。このジョークは、旧東ドイツで語られていたものだという。ひとりの労働者が、シベリアで働くことになった。彼は、シベリアから出す自分の手紙が、当局によって［エ］なされるだろう、ということを知っていたので、シベリアへと発つ前に、親友にこう言ったという。「俺たちの間で、秘密のコードを作っておこう。手紙が、普通の青いインクで書かれていれば、その内容は真実だが、もし赤いインクで書かれていれば、そこにあることは虚偽だ」。その一カ月後に、シベリアにいる男から親友に手紙が来た。文章は［A］いインクで書かれていた。次のように。

　ここでは、すべてがすばらしい。店に品物がいっぱいあるし、食料もいっぱいだ。アパートは広くて、暖房も快適。西側からの映画も見られる映画館がある。きれいな女の子もたくさんいる。ここで不自由なこと、使えないものはただ一つ、［B］いインクだけだ。

もちろん、このジョークの趣旨は、シベリアには自由がない、というこ

とにある。ほんとうは、シベリアでは、店に品物がほとんどなく、欲しいものも買えない。見たい映画を上映している映画館もない。女の子と遊ぶこともできない。等々。

　だが、ここに書かれていることを、虚偽としてではなく、そのまま文字通りうけとった場合には、このジョークは、むしろ、現在のわれわれの状況の記述になるだろう。確かに、われわれは自由だと言わざるをえない。商品はたくさんあって、何を買ってもよい。いくらでも映画を見ることもできる。恋愛や交際も自由だ。しかし、ただ一つ欠けていることがある。われわれの「不自由」を分節する言語（［C］いインク）がないのだ。「自由か不自由か」と問われれば、十分な自由があると言うほかなく、われわれがいかに自由かを［D］いインクで書くしかない。しかし、にもかかわらず、われわれは、どこか根本的な部分で不自由だ。その不自由を［オ］する方法を、つまり「［E］いインク」をわれわれは持っていない。

　あるいは、われわれの状況を、精神分析をはじめとする何らかの「治療」を受けにきた精神疾患の患者に喩（たと）えてみることができる。普通の病気の場合には、症状は問題（の一部）であり、患者は、医者に、それへの解決を求めている。しかし、精神疾患や神経症の場合には、問題と解決の関係が、

これとは逆になっていることに気づく。これらの場合には、症状はすでに、何らかの問題に対する応答（回答）である。患者は、何かの問題に応答しようとして、症状を形成しているのだ。しかし、それは、何に対する応答なのか、何が問題なのか、それがわからないのだ。普通の病気の場合には、問題が症状として与えられ、医者は、この問題への回答を探す。しかし、精神疾患では、回答はわかっているのだが、それが、どんな問題への回答かわからないのだ。専門家に委ねられるのは問題を探すことだ。

　現在のわれわれの状況は、この精神疾患のケースに喩えられる。どこか空虚な自由、奇妙な[5]ヘイソク感をともなう過剰な自由は、何かへの応答であり、「症状」のようなものである。しかし、それは何への応答なのか。何が問題なのか。それがわからない。

（大澤真幸『自由という牢獄』による）

（注）メルクマール＝目印、標識を意味するドイツ語。
ミシェル・フーコー（一九二六〜一九八四）＝フランスの哲学者。
アイザイア・バーリン（一九〇九〜一九九七）＝イギリスの哲学者。
モーセの十戒＝『旧約聖書』においてモーセが神から与えられた十の戒律。

スラヴォイ・ジジェク（一九四九〜　）＝スロベニアの哲学者、精神分析家。

ミヒャエル・エンデ（一九二九〜一九九五）＝ドイツの児童文学者。

問一　傍線部1〜5の片仮名を漢字に直して、記しなさい。

問二　空欄ア〜オに入るもっとも適切な語を、次のa〜rの中からそれぞれ一つ選んで、記しなさい。ただし、一つの語は一箇所にしか入りません。

a　義務　b　権利　c　逆説　d　結末　e　規範　f　解決
g　表現　h　直訴　i　使命　j　解放　k　検閲　l　仮説
m　改善　n　没収　o　啓示　p　満足　q　回覧　r　聴取

問三　傍線部Xで筆者は「これほどまでに、われわれの社会は許容的である」と述べていますが、それは「われわれの社会」がどのようになっていることをさしていますか。その説明としてもっとも適切なものを、次の1〜5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　人権思想と民主主義が世界を席巻していること
2　第一の自由が第二の自由の最後の障壁を崩すまでになっていること
3　啓蒙主義の時代の知識人が理想とした二種類の自由を完全に享受できていること
4　グローバル化が進み、人々の権利意識が多様化して、何でも許されるようになっていること
5　無神論者が多数派となり、神の戒律はもはや守るべきものとは見なされなくなっていること

問四　傍線部Yに「あれほど脱出することを渇望していた彼が、やがて何も欲しなくなった」とありますが、「何も欲しなくなった」のはなぜですか。その説明としてもっとも適切なものを、次の1〜5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　気が多すぎて、かえって混乱してしまったから
2　期待が大きすぎて、がっかりしてしまったから
3　許容範囲が広すぎて、やる気を失ってしまったから
4　恐怖にとらわれすぎて、前に進めなくなってしまったから
5　決断力がなさすぎて、きっかけをつかめなくなってしまったから

問五　空欄A〜Eには、赤か青、いずれかの漢字が入ります。その組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の1〜5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　赤―青―青―青―赤
2　青―赤―赤―青―青
3　青―赤―青―赤―青
4　青―赤―赤―青―赤
5　赤―青―赤―青―赤

問六　傍線部Zに「自由が不自由へと反転するのは、どのような機制によるのか」とありますが、「反転」をひき起こす「機制」とはどのようなものですか。次の文章はそれを説明したものです。空欄Ⅰ・Ⅱに、本文の表現を用い、指定の字数内でもっとも適切な語句で記述して、文章を完成させなさい（字数は句読点、記号、符号を含みます）。

いかなる禁止をも乗り越えて［　Ⅰ　］（十字以内）ことは、あらゆることが許されるからこそ選択が困難になる世界へと人を導いてしまう。つまり、すべてが許容されることで［　Ⅱ　］（十字以内）世界が出現するという機制が働いていることになる。

（次ページより解答欄）

問一

1

2

3

4

5

問二

ア

イ

ウ

エ

オ

問三

問四

問五

問六

Ⅰ

Ⅱ

第五講　「分析」から「総合」へ

次の文章は、山崎正和が二〇一一年に刊行した『世界文明史の試み』の序章の一節である（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

何ごとであれ目に見える存在には様式というものがあるが、当然、現代の健康にも、健全な身体のあり方にも一定の様式がある。どんな身体が健康であるか、どんな身体の容姿と機能が理想的であるか。それについていま、一つの価値観が世界を覆いつつあるといえる。

きわめて大ざっぱにいえば、現代の身体の理想像には古典ギリシャ彫刻の様式が復活したといえそうである。容姿に関しては、ほぼ七頭身か八頭身の頭身比例が好まれ、女性ならくびれた腰と豊かな乳房、男性なら高い身長と筋肉質の胸や四肢が喜ばれる。顔については「［　A　］眸皓歯（ぼうこうし）」が男女ともに好まれ、この理想像は映画やテレビや広告写真などに載って、人種と民族を問わず受容されている。もちろん髪型や化粧の細部はめまぐるしく変化するが、この変化も服飾の流行と同様、ほとんど瞬時に世界各

国に伝播している。

かつて民族ごとにあった特殊な身体風俗、顔を含む全身の刺青や首の延伸、耳朶や唇に円盤を嵌めこむ変形手術、中国全土に見られた纏足などの身体矯正の伝統は消滅した。日本でもお歯黒や「富士額」の美意識は忘れられたし、履き物の変化とともに女性の歩き方の規範も大きく変わることになった。西洋におけるコルセットの廃止、入浴の頻度のいちじるしい増大なども、そうした身体文明の世界的統一の一例に数えられるだろう。

だが身体についてより重要なのは、容姿よりも運動能力であるのはいうまでもない。身体はその筋肉と骨格の構造から、つねに動こうと身構え、格別の目的がなくてもたえず小さく動いている存在である。そして逆に身体は動くことによって形成され、動きの様式によって容姿と形態を決定されている。ホモ・サピエンスはもともと二足歩行の可能な身体構造を備えているが、その構造は幼児期に教育を受けたうえ、現に歩くことによって初めて完成され、一生を通じて歩き続けることによって強化されているのである。

その意味で身体のあり方と運動の様式はほぼ同義語なのであるが、この様式が十九、二十世紀を通じて世界的に標準化されてきたのは明らかだろう。もっとも身体運動の標準化は、十九世紀段階ではおもに生産労働の規

格化を通じておこなわれた。機械生産が普及したうえ、農業や土木工事のような作業も近代化され、それに応じて労働の仕方も世界共通の様式を持ち始めた。もちろん職人仕事、家事労働といった分野ではまだ伝統の違いが残っているが、大企業の事務や製造や販売の現場など、文明の中心を占める労働の分野では国際化が進んだ。早い話が、算盤（そろばん）や鋸（のこぎり）の使い方には地域による差違があるが、電卓や電動鋸の操作法にはもはやそんなものはないのである。

　そういえば、かつて農耕民族は二拍子の運動を好み、狩猟民族は三拍子を喜ぶといった文明論が語られることもあった。それ自体の真偽はともかく、いずれにせよそうした文明を分かつような大きな運動様式の対立は消えていった。日本人の歩き方を例に見ても、右手と右足を同時に前に出す「なんば」と呼ばれる伝統的な様式も、いまでは相撲と歌舞伎という特殊な分野にしか残っていない。

　しかしここで忘れてはならないのは、人間の身体運動はそもそも、そうした生産や実用の世界に限られていないということだろう。[1]身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである。外界に働きかけるだけではなく、身体が身体であるために、身体が存続するためにたえず機能しているものなのである。

身体はしばしば、倦怠（けんたい）感や所在なさを解消するためだけにも動く。みずからを癒し、みずからを粧い、みずからを強めるためだけにも動く。何よりもみずからの存在を感じ、それを鋭く意識するために動く。身体はみずからがあることを確かめ、その存在感を味わうためにも運動するのである。要するに生産的、実用的な身体運動が「する」身体の営みだとすれば、ここにはもう一つ別の運動があって、それは「ある」身体の自己確認の営みだといえるだろう。

そしてとりわけ二十世紀に顕著なことは、世界的な統一の趨勢（すうせい）が、この身体の自己確認のための運動の様式にまでおよんだことであった。非生産的、非実用的な行動の様式が、にわかに文明の境を超え始めたのである。

まずいわゆる文化交流の進展に伴って、日常生活の礼儀作法の共通理解が深まった。西洋風のテーブル・マナーと食器が東漸したのにたいして、やや遅れて箸（はし）の使い方を西洋人が学ぶようになった。椅子とベッドの生活が日本の家庭に浸透したころ、アメリカの居間ではラグを床に敷いて座ってくつろぐ姿がめだち始めた。握手、抱擁、お辞儀、接吻といった挨拶の様式も、若い世代では異文明のあいだで共通の意味を持つことになった。異質性は宗教儀式とそれにまつわるタブーの領域に限られ、世俗的な祭典というべき交歓の様式は世界のどこでもあい似ている。とくに若者の舞踊

や音楽、パーティーやイベントに集まって楽しむ騒ぎ方には、東西南北の違いはほとんどなくなったといえるだろう。

　だがそれ以上に重要なのは、二十世紀におけるスポーツの地球規模の普及であった。一つには野球やテニスやサッカーなど商業スポーツの影響、もう一つには一八九六年に始まったオリンピックの寄与が大きかった。

　ここで注意しておくべきことは、スポーツが一見、「する」身体の行動であるように見えながら、じつは典型的な「ある」身体の行動だという事実である。たしかに速く走ることも、高く跳ぶことも、ボールを投げたり蹴ったりすることも、一応は身体が外界に関わる行動の一種だろう。だがそのさいスポーツが関わる外界はいわば虚構の外界であって、産業労働や家事労働が関わるような真の現実ではない。スポーツの外界は、真の現実がつねに持つ偶然性を極限まで免除され、現実行動にとっては避けがたい、いわゆる［　B　］からも解放されているからである。

　たとえば一〇〇メートル競走の場合、走る路面は完全に平坦（へいたん）に整備され、ランナーは風を除くいっさいの［　C　］に配慮する必要はない。これが現実の疾走なら、走者は路面の状況から交通渋滞、風雨から自分の服装にいたるまで、おびただしい［　C　］の心配にわずらわされて走らなければなるまい。ついでにいえば、スポーツでは競技者は目的も方法も厳密に

与えられていて、目的にとって最適の方法をみずから選択するというわずらいも持たない。現実の走者はあまたある移動手段の比較考量を迫られるのにたいして、一〇〇メートル走者はただ足で走ればよいのである。

さらにスポーツが選手に与える行動の目的は、スポーツそのものが決めたルールがあるだけで、それ以上の広い現実の要求によるものではない。マラソンが四二・一九五キロメートル走るのは［D］なルールにすぎず、真の現実のなかで合理的な意味は持たない。裏返していえば、マラソンの完走はそれだけで［E］を持つのであって、より上位の意味を持つ目的の手段となって奉仕することはないのである。現実の人生において、すべての行動の目的がその次の目的の手段となる関係にあって、目的が無限の連鎖をつくっているのに比べて何という違いであろう。

こう考えると、スポーツの本質はやはり舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、自己の「ある」身体を一定の様式によって確認する方法だと理解できる。それは何かを「する」ことによって外界に関わる行動ではなく、［F］、いいかえれば「私である」身体に関わって、その存在感を確認して楽しむ営みだといえる。各種のスポーツのジャンルとそれぞれのルールは、その自己確認のための様式であって、また反対に、それに従うことによって身体そのものも存在様式を獲得することができるのである。

（山崎正和「世界文明史の試み──神話と舞踊──」）

問一　空欄［A］に漢字一字を入れると容貌に関する四字熟語が完成する。その漢字を解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二　傍線部１「身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである」の意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　身体運動は私たちがあえて何かをしようとするときだけではなく、筋肉や骨格の構造という私たちの身体のしくみにしたがって、つねにその内部でもおこなわれている。

ロ　身体運動は生産的、実用的に発揮されるだけではなく、つねにそれと平行して私的、非実用的な形でも遂行されるように身体のなかで準備されている。

ハ　身体運動はおもてにあらわれるその形に本質があるというよりは、身体の構造のなかに隠されたその状態に本来の姿がある。

ニ　身体運動はその場で全面的に発揮されるものではなく、身体構造のなかにつねになにがしかは残ったままになっている。

ホ　身体運動は外界に向けておこなわれるだけではなく、じつは身体の構造を通じて精神の深部にも作用する。

問三　空欄［B］に入る最も適当な語句を、次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　選択の自由　　ロ　方法の必然　　ハ　理想の実現　　ニ　目的の連鎖　　ホ　虚構の必要

問四　空欄［C］（二箇所ある）に入る漢字三字の語句を文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問五　空欄［D］・［E］に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

D　イ　空間的　　ロ　主観的　　ハ　自然的　　ニ　人間的　　ホ　恣意的

E　イ　開かれた意味　　ロ　現実的な意味　　ハ　合理的な意味　　ニ　完結した意味　　ホ　理想的な意味

問六　空欄［F］に入る最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　行動するだけで価値のある身体　　ロ　存在するだけで価値のある身体

ハ　行動するだけでは価値のない身体　　ニ　存在するだけでは価値のない身体

ホ　存在と行動の完全に一致する身体

問七　問題文の趣旨と一致するものを、次のイ～ホの中から二つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　身体のあり方と運動の様式が地球規模で標準化したにもかかわらず、「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、スポーツによる身体の自己確認に関して興味深い事実が指摘される。

ロ　身体運動の標準化は十九世紀以来まず「する」身体において進行したが、「ある」身体は基本的に非生産的、非実用的なものであるためにその標準化はなかなか思うように進んでいない。

ハ　身体のあり方と運動の様式について一つの価値観が世界を覆いつつあるが、しかし「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、後者に対する前者の優位が特にスポーツの普及を通じて明らかに認められる。

ニ　「私である」身体の存在感を確認して楽しむ営みであるという点において、スポーツは舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、偶然性を排し、繰りかえしの要素を含みつつ、しかしその度ごとの発見や成功、そして喜びを伴うものである。

ホ　健康な身体についての同じ価値観が世界を覆いつつある今日、ますます商業化の進んでいくスポーツは何らかの宗教的な意味を見いだして異質化を図らない限り、「する」身体と「ある」身体の区別に関係なく存在意義を失う瀬戸際にある。

問八　問題文の趣旨に即して、「する」身体と「ある」身体とのあいだに見いだされる違いを、三十字以上四十字以内で解答欄（記述解答用紙）に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

一　キーワードとして「画一性」「個別性」という語句を文中に用いること（ただし、カギカッコをつけなくてよい）。

二　句読点や符号なども字数に数えること。

三　文頭の一マス目を空けないこと。

（次ページより解答欄）

問一

眸皓歯

問二

問三

問四

問五

D

E

問六

問七

問八

30

解答解説

第一講 「差異」と「類似」を読む 解答

問一
ⓐ 眼前
ⓘ 示唆

問二
b

問三
a

問四
e

問五
c

問六
ⓤ d
ⓔ a
ⓞ a
ⓚ d
ⓚi e

問七

思考は文と同様に概念的であるのに対し、脳の中の表象は非概念的である知覚的なものでしかないということ。

第二講　「論証」を読む　解答

問一　オ

問二　イ

問三　エ

問四　場の空気に左右される中身のないものであり、仲間から自分が排除されることが不安でやめられないから。

問五　エ　オ

問六　b

第三講　「心情」を読む　解答

問一	(ア) 1　(イ) 4　(ウ) 3
問二	1
問三	5
問四	1
問五	3
問六	2　3

第四講　「様々な設問」を解く　解答

問一

1	2	3	4	5
偶像	賢明	誘惑	覆〔蔽〕	閉塞

問二

ア	イ	ウ	エ	オ
e	o	c	k	g

問三　2

問四　3

問五　4

問六

Ⅰ 人権が許容される

〔人権が保障される〕

Ⅱ 自由が不自由になる

〔自由が束縛になる／解放が束縛である〕

第五講「分析」から「総合」へ　解答

問一　明　眸皓歯

問二　ロ

問三　ニ

問四　偶然性

問五　D　ホ　E　ニ

問六　ロ

問七

イ

ニ

問八

「する」身体は画一性しかないのに対し「ある」身体はそれに加え個別性も確認できる。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。